

青年期における死の不安と精神的健康の関連

—死の不安への対処方略に焦点を当てて—

本郷 光・岡本祐子・池田龍也

Relationship between death anxiety and mental health in adolescents from the perspective of coping strategies for death anxiety

Hikari Hongo, Yuko Okamoto, and Tatsuya Ikeda

The purpose of this study was to examine the relationships between death anxiety and mental health in adolescents, with a focus on coping strategies for death anxiety. The result indicated that participants who do not cope at all with death anxiety have low death anxiety, but are in bad mental health. Moreover, it was indicated that participants who tried to be careful about their health and have a lifestyle in which every day was fulfilling showed lower scores for depression than those who frequently thought about death and talked about it with others. Furthermore, we found a significant positive correlation between mental health and anxiety about dying with goals left unmet. We conclude that death anxiety has both negative and positive correlations with mental health, depending on coping strategies.

キーワード : death anxiety, adolescent, coping strategies, mental health status

問題と目的

青年の死の不安

死に関する諸問題は一般的に、老年期の発達課題やターミナル・ケアなどにおいて最も焦点を当てられている(松田, 2012)。死は老年期だけに限定された主題だと捉えられがちであるが、多くの青年が死に対して恐怖や不安などの否定的な感情やイメージを抱いていることが指摘されている(一色・河野, 2000; 藤井, 2003)。青年群と老年群の比較研究では、死に対してのイメージを SCT で尋ねた下仲(1980)の研究において、死を恐怖、悲哀、拒否感情で見ている反応が青年群に多くみられている。また、青年期の方が死の不安を感じる人が多いこと(堀, 1996)、より強い死の不安を感じること(岡村, 1983; 田中・後藤・岩本・李・杉・金山・奥田・國次・芳原, 2001; 富松・稲谷, 2012)を指摘する研究も存在する。このように、死に近いと考えられる老年期よりも、むしろ青年の方が死を否定的に捉えている可能性が示唆されている。金児(1994)は、青年は死に触れる機会の少なさゆえに、死への対処の仕方を知らず、死についてより不安・恐怖を抱く傾向にあると述べ

ている。加えて、若者にとって死は差し迫った問題ではないけれども、死によって奪われるものがより多いが故の反応かもしれないとも述べている。

死の不安を感じやすい青年の特徴

人間は、常に死を意識しているわけではない (松下, 2009)。特に死が現前していない青年の場合、不安を感じる状況や場面は限られており、個人差も大きいと推測される。朝野・滝本・野原・野原 (1988) は、死の不安と正の相関を示す性格特性として抑うつ性、劣等感、神経質をあげている。海外においても、Cox, Berger, Asmundson, & Taylor (2000) や Frazier & Foss-Goodman (1988-1989) が重回帰分析を用いた検討を行い、神経症傾向や外向性、タイプ A 性格がそれぞれ死の不安を予測すると報告している。

また、劣等感や神経症傾向などの性格特性に加え、過去に経験したライフイベントの影響が検討されている。中でも死別体験は人間にとって最もストレスフルな出来事であるといわれ (尾方・松下, 2009)、重要な他者との死別体験が死に対する態度を変容させることが指摘されている。木村・広海 (1990) は、父母、兄弟姉妹などの家族 (祖父母は除く) との死別経験者の群は、祖父母のみの死別経験者群よりも死の不安得点が有意に高かったと述べている。一方、祖父母のみの死別経験のある者の死の不安得点は、家族との死別経験のない者と同程度に低かった (木村・広海, 1990)。

以上のことから、死の不安を感じやすい青年の特徴として、①神経症傾向、劣等感、タイプ A 性格等の性格特性がみられる、②両親やきょうだいなど、重要な他者の死を経験している、の 2 点が考えられる。

死の不安の発達的变化

死の不安と年齢の関連について丹下 (2004) は、「児童期前半に死の概念が成立するとともに、人は死を恐れるようになる。青年期から成人期にかけて死に対する恐怖は減少から増加へと大きく変化し、成人中期に最も強く死を恐れる。それが再び成人後期において死に対する恐怖が減少するとともに、次第に死を受容するようになっていく、と推測される」と述べている。しかし、青年期から老年期における死の不安の変動については、一貫した結果が得られていない。Gesser, Wong & Reker (1988-1989) は、年齢と死の恐怖の関連について、青年群において比較的高く、中年群にピークとなり、老年群において最も低下すると報告している。一方岡村 (1983)、田中他 (2001) の調査では、老年群よりも青年群の死の不安が高いものの、青年群と中年群の間に有意差は確認されなかった。

Rasmussen & Brem (1996) は、死の不安と年齢の間には弱い負の相関がみられるとしたうえで、死の不安の変化を説明する要因として年齢と心理社会的発達をあげ、検討を行った。その結果、年齢が死の不安の分散の 2 % ($p < .05$) を、心理社会的発達は 6.5 % ($p < .0001$) を説明し、年齢よりも心理社会的発達のほうが死の不安をよく予測する可能性が示唆された。この研究から、死の不安の発達の変化を捉えるには、実際の年齢だけでなく心理面での発達も考慮する必要があると考えられる。

死の不安の定義

死の不安についてはこれまで数々の研究が行われてきたが、死の不安を明確に定義づけているものは少なく、概念が曖昧なままであるものが多い。また、不安と似た概念である「恐怖」との区別

も不明瞭である。しかしその中で、松田 (1996) は、死の不安は「死が現前していないときの、いずれは自分にも死が訪れる可能性に対する漠然とした恐れ」であり、死の恐怖は、「死が現前しているときの、死から逃れたいという感情」であると、それぞれを弁別して定義している。この松田 (1996) の死の不安の定義の重要な点は、死の原因の種類にかかわらず、死が現前しているか否か、すなわち現在死ぬ可能性が高い状況におかれているか否かという視点にあると考えられる。松田 (1996) の定義を踏まえると、「大雨で家が流されているニュースを見て、死ぬことが怖くなった」のは死の不安で、「今大雨が降っていて、自分の家が流されそうで怖い」のは死の恐怖であると考えられる。また、Tomer & Eliason (1996) は、死の不安は「自分が存在しなくなった状態を予期することによって引き起こされるネガティブな情動的反応」であり、死にゆくことの恐怖は「死にゆく過程を予期することによって引き起こされるネガティブな情動的反応」であると弁別して定義している。したがって、死の不安を引き起こす刺激は「自分が存在しなくなった状態」であると考えられる。これらの定義から松田 (2012) は、青年が死を目前とした者ではないこと、直接的に死に関わる経験が少ないため、死にゆく過程での苦痛よりも、死が自分にも訪れることの方がイメージしやすいことを踏まえ、青年期を対象にする場合、死の恐怖や死ぬことの恐怖ではなく、死の不安について検討するのが最も適切ではないかと述べている。

以上のことから、死の不安の定義のポイントは、①自分が、今すぐ死ぬ可能性は低い状況で生じること②ネガティブな情動的反応であること③ネガティブな情動的反応を引き起こす刺激は、いずれ自分にも死が訪れる可能性、自分が存在しなくなった状態である、の3点だと考えられる。そこで本研究では、松田 (1996) と Tomer & Eliason (1996) の記述を参考に、死の不安を「自分が直ちに死ぬ可能性が低い状況において生じる、いずれ自分にも死が訪れるという回避できないライフイベントに対してもつネガティブな感情」と定義する。

青年の死の不安の測定

死に対する態度を扱った先行研究では、Templer (1970) の開発した DAS (Death Anxiety Scale) が頻繁に用いられ、多くのデータが蓄積されてきた (e.g., 金児, 1994; 橋本, 2001)。しかし、DAS には「心臓病の発作が起きることを心配している」「戦争に巻き込まれると人々が話しているのを聞くとぞっとする」のように、現代の日本人青年には実感しづらく、測定に適当でないと思われる項目が含まれている。また金児 (1994) は、「われわれが死に対して恐れを抱いたり、死の恐怖から解放されたりするのは、死がいろいろな意味をもつからである。たとえば、未知なるものであるがゆえの恐怖と不安がある。あるいは、肉体的苦痛への恐怖がある。死後の自分はどうなるのか、遺族はどうなるのか、といった精神的苦痛もある。あるいは、やり残した仕事に対する心残りがあある。一方、死後の理想世界を描くことによって、死の恐れが和らぐ場合もある。あるいは、人生の総決算の機会として、死に積極的意味を見いだそうとすることもあある」と述べ、死の不安を多面的に理解することの重要性を指摘している。

Templer (1970) の DAS 以後、死の持つさまざまな側面における態度を測定するための尺度が作成されているが (Spilka, Stout, Minton & Sizemore, 1977; 河合・下仲・中里, 1996; 丹下, 1999; 隈部, 2003), 死の不安に特化したものは少ない。諸外国においては Hoelster (1979) の死の不安に関する多

次元的尺度 (Multi-dimensional Fear of Death Scale; MFODS, 得丸・小林・平・松岡, 2006 によって邦訳), Collett & Lester (1969) の Collet-Lester fear of death scale (辻本・久保田, 2013 によって邦訳) などが考案されているものの, 論文中に「恐怖 (fear)」という言葉が多用され, 死の不安の定義が十分でないこと, 海外の項目の日本語訳であるためわが国との文化差が存在することが問題点としてあげられる。

以上を整理すると, 青年の死の不安を測定する際は, ①文化差を考慮し, 日本人に適した項目を用いている②死の不安の定義が明瞭である③複数の因子を仮定している尺度を用いることが必要であると考えられる。

死の不安と精神的健康の関連

死に対する反応には, 不安をはじめ, 回避や受容など様々なものがある。そのような反応の中でも特に, 死の不安は心理的不適応と強く関連していることが示唆されている。赤澤・藤田 (2007), Conte, Weiner, & Plutchik (1982) は, 死の不安と抑うつとの正の相関を指摘している。また, Durlak (1972) は死の不安の低さが QOL (Quality of Life) の高さと関連することを示し, QOL が高い人の死の不安は低いと述べている。これらの先行研究から, 死の不安は精神的健康を考える上で非常に重要な要因であると考えられる。

しかし, 死の不安が全くない状態が望ましいというわけではない。久保田 (2013) は, 臓器移植や延命治療, 死後の世界について考えることの多い群では, 死の不安が高い方が心理的 well-being が高くなることを示している。また, Miller & Mulligan (2002) は, 人間の欲求の基本は生存のための本能的な自己防衛であるため, 死の不安は全ての人に内在し, 深く根付いていると述べている。死の不安を抱くことによって, 人生をより良いものにしようという動機づけが働くとする知見も存在する (渡辺・平井, 1999)。Hankoff (1975) は, 青年は死の危険があるような無謀な行動 (猛スピードで車を運転する, など) をしがちであることを指摘しており, 死の不安が極端に低い状態では, こうした無謀な行動が多く出現すると考えられる。Deeken (1986) はデス・エデュケーション (死の準備教育) の目標に, 死への恐怖の軽減を掲げている。しかし, それは過度の不安が悪影響を及ぼしている場合 (辰巳, 2000) であり, 死に対する恐怖・不安を完全になくすことではない。死は生命の終わりであり, 不安や恐れを抱くのはむしろ自然なことである (赤澤・辻本, 2003)。

主観的幸福感と心理的 well-being

赤澤・藤田 (2007), Conte et al. (1982), Durlak (1972)らが死の不安の否定的な影響を主張しているのに対し, 久保田 (2013) は死の不安が高い場合でも精神的健康が向上する可能性を示唆している。このような矛盾した結果がみられる理由として, 精神的健康の指標の質的な違いが考えられる。Keyes, Shmotkin, & Ryff (2002) は, 人間が心理的に「よく在る (well-being)」状態を2つの観点から捉えている。

ひとつは個人の快状態を反映する快樂主義に基づく (Ryan & Deci, 2001) 主観的幸福感 (subjective well-being) であり, 「幸せな生活」(Keyes & Ryff, 2002)と換言されるように, 自己の情動状態の快・不快についての主観的感覚を意味する。主観的幸福感は精神的健康を示す指標として伝統的に取り上げられ, 具体的には抑うつ・不安のなさや人生に満足していることがあげられる (伊

藤・小玉, 2005)。

これに対して, Ryff(1989) は, 主観的幸福感が情動状態のみに注目している点で well-being を包括的には把握できていないと指摘し, 心理的 well-being (psychological well-being) という概念を提唱した。これは, 理性的成熟を反映する理性主義に基づく概念であり (Ryan & Deci, 2001), 「意味ある生活」(Keyes & Ryff, 2002) と言われているように, 自己の生活に対する有意味さの感覚を指し, 具体的には自分が成長しつつあり, 人生に目的を持っていて, 自己決定し, 暖かい他者関係を築いているという感覚が含まれている (伊藤・小玉, 2005)。

以上の知見を踏まえると, ネガティブな情動である死の不安は主観的幸福感を低下させる要因であることが推察される。一方で, 死の不安がより良い人生への動機づけにつながる (渡辺・平井, 1999) 可能性を考慮すると, 主観的 well-being とは反対に心理的 well-being は高まる可能性が示唆される。すなわち, 用いる精神的健康の指標によって, 死の不安の効果が異なることが推測される。したがって, 死の不安と精神的健康の関連を検討する際は, 死の不安のポジティブな効果をみるために, 心理的 well-being の観点からより詳細に理解することが重要であると考えられる。

死の不安への対処方略

青年が強い死の不安を抱いているといわれる一方で, 青年期における死の不安への対処に注目した研究は, 数が多いとは言えない。岡村 (1983) は, 青年前期は死から目を背けるか無関心かで死の不安に対抗すると述べている。また, 青年は死への対処の仕方を知らないとする知見 (金児, 1994) も存在する。浅本・小川・鈴木 (2006) は, 死の不安への対処尺度を作成し, 岡村 (1983) の提唱した回避的な対処だけでなく, 6 因子 (「充実」, 「熟考」, 「身体管理」, 「受け入れ」, 「感情表出」, 「回避」) を抽出している。これら 6 つの対処方略が死の不安に与える影響を検討した浅本他 (2006) は, ①死について情報を得たり自分なりに考えて解釈しようとしたりする「熟考」対処は, 死の不安を促進する, ②健康に気をつけたり事故に遭わないようにしたりして命を大切にする「身体管理」対処は, 死の不安を促進する, ③死を誰にでも訪れる普遍的なものとして受け入れようとする「受け入れ」対処は, 死の不安を抑制する, ④死について考えないようにし, 死の不安を避けようとする「回避」対処は, 死の不安を促進することを示した。このように, 死の不安を増加, または低減させるような対処を明らかにすることは, 死の不安へよりよく対処していくためにも有益であると考えられる。以上の先行研究をまとめると, ①死の不安は精神的健康に影響を与える重要な要因であり, ②使用する対処方略によって死の不安が増加, または低減し, それに伴い精神的健康度も変動することが推測される。

対処方略の選択

浅本他 (2006) の研究の結果から, 死の不安の低減には「受け入れ」対処が有効であることが示唆された。しかし, すぐに「受け入れ」対処を実行できる青年はそう多くないと考えられる。例えば, Kübler-Ross (1971) が提唱した死の受容の 5 段階モデルでは, 第 1 段階: 否認 (自分が死ぬということは嘘ではないかと疑う段階), 第 2 段階: 怒り (なぜ自分が死ななければならないのかという怒りを周囲に向ける段階), 第 3 段階: 取り引き (なんとか死なずにすむように取引をしようと試みる段階), 第 4 段階: 抑うつ (なにもできなくなる段階), 第 5 段階: 受容 (最終的に自分が死にゆく

ことを受け入れる段階) のように、受容までに 4 つの段階を踏まなければならない。Kübler-Ross (1971) のモデルは末期患者との対話から得られたものであり、死が差し迫っていない青年と一概に比較はできないが、いきなり「受け入れ」対処を行うことは難しいと考えられる。また、「受け入れ」対処に限らず、複数の対処を組み合わせたり、さまざまな対処を試行錯誤したりしている可能性が考えられる。浅本他 (2006) の「熟考」対処を例に考えると、「感情表出」対処や「充実」対処との間に正の相関がみられており、自分自身で死について考えると同時に、他人に気持ちを話して落ち着こうとしたり、熟考した結果後悔しない生き方をしようとしたことが推察される。したがって、死の不安への対処を検討する際は、その対処を選択した要因や、他の対処との関連に注目することが必要だと考えられる。

本研究の目的

死の不安は、精神的健康と強い関連がみられることが示唆されており、先行研究では、老年期と比較して青年期の方が死の不安が高い傾向が示されている。死の不安の低減には「受け入れ」対処が有効であり (浅本他, 2006), 精神的健康に寄与すると考えられる。しかし、浅本他 (2006) の知見をもとに考えると、青年は複数の対処方略を組み合わせたり、さまざまな対処方略を試行錯誤したりしている可能性が考えられる。また、青年がどのようにして「受け入れ」対処をはじめとする死の不安への対処方略を選択するかは明らかになっていない。また、死の不安と精神的健康に関する研究の結果は一貫しておらず、死の不安が低減されるべきものかどうかについては、さらなる検討が必要である。両者の関連を明らかにするには、死の不安を明確に定義し多面的に捉えるとともに、精神的健康の指標によっては死の不安の効果が異なる可能性を考慮することが重要だと考えられる。以上のことから本研究では、対処方略の組み合わせによって、死の不安および精神的健康の程度、両者の関連が異なるか検討すること (調査 1)、それぞれの対処方略を選択する青年の死に対する考え方の特徴について検討すること (調査 2) を目的とする。

調査 1

目的 死の不安への対処方略の組み合わせによって、死の不安および精神的健康の程度、両者の関連に違いがみられるかを検討する。

方法 参加者 A 大学の学生を対象に 258 部質問紙を配布、回収した。そのうち、欠損が全項目の 10%以上にわたってみられるもの ($N=10$), 青年でない回答者 ($N=1$) は分析対象から除外した。最終的な分析対象は 247 名であった (男性 142 名, 女性 99 名, 不明 6 名)。平均年齢 20.34 歳, $SD=1.08$ 。

倫理的配慮・手続き 本調査の実施にあたっては広島大学倫理審査委員会の承認を得た。調査の前には、回答は自由意思であり、得られたデータは統計的に処理され個人が特定されないことを説明した。247 名のうち、218 名は集合調査、16 名はスノーボール法、13 名は縁故法で実施した。

質問紙の構成 a) 精神的健康: ①心理的 well-being 尺度 (西田, 2000), 43 項目, 6 件法。「人格的成長」「人生における目的」「自律性」「自己受容」「環境制御力」「理想的な他者関係」の 6 因子からなる。②日本語版 Beck Depression Inventory-II (Beck, Steer, & Brown, 小嶋・古川, 2003), 21 項目, 4 件法。b) 死の不安: 改訂版死の不安尺度 Personal Death Anxiety Questionnaire-Revision: PDAQ-R (松

田, 2012), 15 項目, 5 件法。項目は大学生, 専門学校生を対象としたインタビュー調査をもとに作成され, 「自分自身の死に対して不安が高い大学生は, どのような気持ちや言動がみられると思うか」という趣旨の質問に答えてもらった。「死に関する無力感」「未完」「具体的苦痛」の 3 因子からなる。c) 死の不安への対処方略: 死の不安への対処尺度 (浅本他, 2006), 26 項目, 5 件法。「充実」「熟考」「身体管理」「受け入れ」「感情表出」「回避」の 6 因子からなる。d) 自由記述: 自分自身の死について, どのように考えているかを自由に答えてもらった。e) フェイスシート: 年齢, 性別を尋ねた。

使用機材 分析には HAD 14.7 (清水・村山・大坊, 2006) を用いた。

結果と考察

記述統計量と信頼性係数 内的整合性の確認のために, 心理的 well-being, BDI, PDAQ-R, 死の不安への対処方略の下位因子ごとに信頼性係数を算出した。さらに, 平均値と標準偏差, 最小値, 最大値を算出した。その結果を Table 1 に示す。死の不安への対処尺度の「回避」因子において .64 とやや低い値がみられたものの, 全体としては十分な信頼性が確認された。

相関分析 各尺度間の関連を検討するため, PDAQ-R3 因子, 死の不安への対処尺度 6 因子, 心理的 well-being 尺度 6 因子, BDI の相関分析を行った。その結果を Table 2 に示す。

心理的 well-being と BDI の相関 心理的 well-being の各下位因子, 合計得点ともに BDI (得点が高いほど抑うつ的) と負の相関を示した。

心理的 well-being と PDAQ-R の相関 「死に関する無力感」は心理的 well-being の下位因子「自律性」と, 「未完」は「自律性」を除く下位因子, および合計得点と正の相関を示した。「具体的苦痛」は「自律性」にのみ負の相関を示した。

Table 1

心理的 well-being, BDI, PDAQ-R, 死の不安への対処尺度の各下位因子における信頼性係数および記述統計量		α 係数	M	SD	Min	Max
心理的well-being	人格的成長	.87	38.27	5.96	14	48
	人生における目的	.88	32.80	7.22	8	48
	自律性	.84	28.47	6.01	14	48
	自己受容	.84	18.87	4.48	5	30
	環境制御力	.85	23.86	4.37	11	36
	積極的な他者関係	.77	24.84	4.57	6	36
	全体	.93	225.25	16.32	171	275
BDI		.92	10.60	9.05	0	43
PDAQ-R	死に関する無力感	.90	16.89	6.60	6	30
	未完	.84	13.62	4.08	4	20
	具体的苦痛	.86	10.40	4.61	4	20
	全体	.91	43.41	13.21	15	75
死の不安への対処尺度	充実	.91	15.25	3.71	4	20
	熟考	.84	14.13	5.41	6	30
	身体管理	.83	13.86	3.75	4	20
	受け入れ	.79	16.89	4.40	5	25
	感情表出	.81	8.41	3.95	4	20
	回避	.64	7.54	2.63	3	15

心理的 well-being と死の不安への対処尺度の相関 「充実」、「身体管理」は「自律性」を除く心理的 well-being の下位因子得点、および合計得点と正の相関を示した（「身体管理」と「人生における目的」は有意傾向）。「感情表出」は「自己受容」「環境制御力」「積極的な他者関係」および合計得点と正の相関、「回避」は「自律性」と負の相関を示した。

BDI と PDAQ-R の相関 BDI と「具体的苦痛」との間に正の相関、BDI と「未完」の間に負の相関がみられた。

BDI と死の不安への対処尺度の相関 BDI と「熟考」の間に正の相関、BDI と「充実」および「身体管理」の間に負の相関がみられた。

PDAQ-R と死の不安への対処尺度の相関 「死に関する無力感」「未完」「具体的苦痛」いずれも「受け入れ」以外の下位因子と正の相関を示した（「未完」と「熟考」は有意傾向）。

心理的 well-being の下位尺度間、PDAQ-R の下位尺度間の相関 正の相関を示した。

死の不安への対処尺度の下位尺度間の相関 「身体管理」と「受け入れ」の組み合わせを除いて正の相関がみられた。

有効回答者の類型化 死の不安への対処方略のパターンを検討するため、「充実」「熟考」「身体管理」「受け入れ」「感情表出」「回避」について非階層クラスタ分析（改良 k-means 法）を行った結果、4 クラスタを抽出した。クラスタ数は、情報量基準 AIC、および解釈可能性に基づいて決定した（Table 3）。なお、因子得点は、平均値が 0、標準偏差が 1 になるよう標準化されたものを用いた。各クラスタの標準化得点を Figure 1 に示す。続いて、各クラスタの特徴を検討するために「充実」「熟考」「身体管理」「受け入れ」「感情表出」「回避」を従属変数とする一元配置の分散分析を行った。その結果を Table 4 に示す。

Table 4 を参考に、各クラスタを命名した。また、各因子の特徴は、浅本他（2006）の下位尺度に関する記述を参考にした。

クラスタ 1 は、「熟考」「感情表出」対処の高さに特徴づけられる。この群は、自分自身で死について考え、情報を集めると同時に、他人に気持ちを話して落ち着こうとする傾向にあると考えられる。よって、この群を『内省的対処群』とした。

クラスタ 2 は、「充実」「熟考」「身体管理」「感情表出」「回避」対処の低さに特徴づけられる。この群は、死の不安を感じていても特に何らかの対処方略を実行しようとは思わず、自分の身を死の危険から守ろうともしていない可能性が考えられる。よって、この群を『非関与群』とした。

クラスタ 3 は全体的にどの対処の得点も高く、中でも「充実」「熟考」「身体管理」「感情表出」対処の高さに特徴づけられる。死の不安にさまざまな対処方略を用い、自分自身で死について考えると同時に、他人に気持ちを話して落ち着こうとする傾向にあると考えられる。また、悔いのない人生を送るよう努めるとともに、健康に気を遣っている可能性が推察される。よって、この群を『積極的関与群』とした。

クラスタ 4 は、「充実」「身体管理」対処の高さ、「熟考」「受け入れ」対処の低さに特徴づけられる。この群は、死そのものについて情報を集めたり、死に折り合いをつけようとしたりするよりも、

Table 2

心理的 well-being, BDI, PDAQ-R, 死の不安への対処方略の全変数の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1 人格的成長	—																	
2 人生における目的	.54 **	—																
3 自律性	.19 **	.39 **	—															
4 自己受容	.28 **	.49 **	.41 **	—														
5 環境制御力	.53 **	.47 **	.32 **	.57 **	—													
6 積極的な他者関係	.57 **	.40 **	.05	.31 **	.52 **	—												
7 心理的 well-being	.73 **	.81 **	.58 **	.72 **	.77 **	.63 **	—											
8 死に関する無力感	-.04	-.03	-.22 **	-.05	-.05	.03	-.09	—										
9 未完	.29 **	.34 **	.08	.19 **	.20 **	.30 **	.33 **	.57 **	—									
10 具体的苦痛	-.11 †	-.07	-.18 **	-.05	-.03	-.05	-.12 †	.63 **	.29 **	—								
11 死の不安	.02	.06	-.16 *	.01	.02	.09	.01	.93 **	.71 **	.80 **	—							
12 BDI	-.27 **	-.39 **	-.26 **	-.43 **	-.28 **	-.25 **	-.45 **	.02	-.25 **	.21 **	.02	—						
13 充実	.45 **	.33 **	.06	.27 **	.32 **	.36 **	.42 **	.26 **	.59 **	.13 *	.36 **	-.28 **	—					
14 熟考	-.11 †	.03	.00	.01	-.01	-.07	-.03	.34 **	.12 †	.46 **	.39 **	.20 **	.19 **	—				
15 身体管理	.22 **	.11 †	-.03	.17 **	.19 **	.25 **	.20 **	.39 **	.44 **	.34 **	.47 **	-.17 **	.63 **	.23 **	—			
16 受け入れ	.04	-.01	.06	.08	.08	-.08	.04	-.05	-.08	.06	-.03	.05	.14 *	.23 **	.00	—		
17 感情表出	.04	.07	.05	.16 *	.12 †	.14 *	.13 *	.31 **	.23 **	.22 **	.31 **	.00	.32 **	.55 **	.31 **	.14 *	—	
18 回避	-.04	-.04	-.26 **	.01	.01	.02	-.08	.45 **	.25 **	.34 **	.44 **	.09	.24 **	.43 **	.34 **	.16 **	.39 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 3
非階層クラスタ分析 (死の不安への対処尺度) における各クラスタ数の情報量基準

クラスタ	AIC
1	3905.46
2	3826.00
3	3829.51
4	3809.91
5	3839.53
6	3818.02

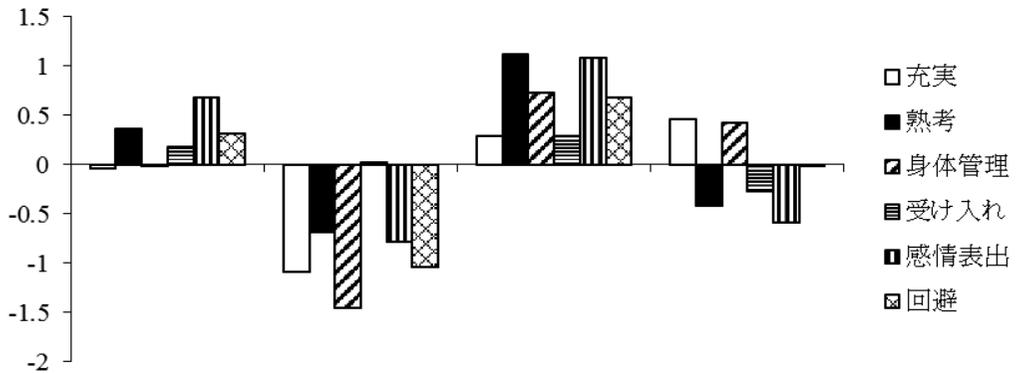


Figure 1. 死の不安への対処尺度によるクラスタ分析結果

Table 4
各クラスタにおける死の不安への対処下位尺度得点の分散分析結果

	内省的 (N=68)	非関与 (N=47)	積極的関与 (N=41)	現実志向的 (N=91)	F値	多重比較
充実	15.10 (3.34)	11.12 (4.51)	16.34 (2.20)	16.95 (2.19)	37.82***	4>1>2 3>2
熟考	16.08 (4.53)	10.42 (4.32)	20.22 (4.53)	11.84 (3.71)	54.79***	3>1>2,4
身体管理	13.82 (2.68)	8.38 (3.03)	16.61 (1.70)	15.47 (2.33)	105.137***	3>4>1>2
受け入れ	17.66 (4.03)	17.00 (5.41)	18.14 (3.53)	15.68 (4.19)	4.28**	1,3>4
感情表出	11.10 (3.16)	5.31 (1.81)	12.68 (3.27)	6.08 (2.11)	107.32***	3>1>2,4
回避	8.35 (2.23)	4.81 (1.70)	9.34 (2.49)	7.53 (2.26)	36.52***	3>1>4>2

() は標準偏差を表す

*** $p < .001$, ** $p < .01$

後悔しないような生き方を心掛けるとともに、死ぬ可能性が低くなるよう、健康に気をつけたり、事故に遭わないように注意したりするなどの行動をとる傾向にあると考えられる。よって、この群を『現実志向的対処群』とした。

対処方略の影響 対処方略のもたらす特徴を検討するために、クラスタを独立変数、PDAQ-R3 因子、

Table 5
死の不安への対処方略クラスと各尺度の下位因子の分散分析結果

	1. 内省的対処群	2. 非関与群	3. 積極的関与群	4. 現実志向的対処群	F値	多重比較
心理的well-being	人格的成長 (6.39)	36.43 (6.22)	37.52 (6.18)	40.28 (4.81)	6.09**	4>1,2,3
	人生における目的 (7.66)	32.21 (7.20)	33.56 (5.42)	33.82 (7.49)	1.77	
	自律性 (6.88)	29.62 (6.94)	29.43 (4.80)	27.90 (5.18)	1.43	
	自己受容 (5.31)	24.47 (5.46)	25.34 (4.58)	24.79 (6.16)	0.20	
	環境制御力 (4.60)	23.38 (4.30)	24.88 (4.63)	24.03 (4.08)	1.29	
	積極的な他者関係 (4.52)	23.00 (4.93)	24.73 (3.60)	25.80 (4.57)	4.05**	4>2
BDI	12.24 (10.15)	11.72 (7.24)	11.27 (11.85)	8.50 (7.11)	2.74*	1>4
PDAQ-R	死に関する無力感 (6.34)	11.96 (6.26)	19.85 (5.52)	17.28 (6.14)	14.23**	1,3,4>2
	未完 (4.22)	10.45 (3.98)	14.62 (3.25)	12.72 (5.43)	6.09**	1,3,4>2
	具体的苦痛 (4.45)	9.64 (4.71)	15.76 (4.65)	12.72 (5.43)	12.16**	1,3,4>2 3>4

() は標準偏差

** $p < .01$, * $p < .05$

心理的 well-being 6 因子, BDI を従属変数とする一要因分散分析を行った。その結果を Table 5 に示す。PDAQ-R の「死に関する無力感」($F(3,243)=14.23, p<.01$)「未完」($F(3,243)=15.28, p<.001$)「具体的苦痛」($F(3,243)=12.16, p<.01$), 心理的 well-being の「人格的成長」($F(3,243)=6.09, p<.01$)「積極的な他者関係」($F(3,243)=4.05, p<.01$), BDI ($F(3,243)=2.74, p<.05$) に有意差がみられたため修正 shaffer 法による多重比較を行ったところ、『非関与群』は他の 3 群よりも「死に関する無力感」「未完」「具体的苦痛」が有意に低かった。また、『現実志向的対処群』は『積極的対処群』と比べ「具体的苦痛」が有意に低かった。精神的健康の指標においては、『現実志向的対処群』は他の 3 群よりも「人格的成長」が有意に高かった。加えて、『非関与群』の「積極的な他者関係」は他の 3 群と比較して有意に低かった。BDI 得点は『現実志向的対処群』が『内省的対処群』よりも有意に低かった。さらに、対処方略の違いによって死の不安と精神的健康の関連が異なるか検討するために、クラスタごとに PDAQ-R3 因子, 心理的 well-being 尺度 6 因子および合計点, BDI の相関分析を行った (Table 6~9)。その結果, 「死に関する無力感」と「具体的苦痛」は『内省的対処群』『非関与群』『現実志向的対処群』では心理的 well-being との間に正の相関, BDI との間に負の相関を示す傾向がみられた。一方で、『積極的関与群』では, 「死に関する無力感」と「具体的苦痛」は「環境制御力」との間に正の相関を示した。また, 「未完」は『内省的対処群』『非関与群』『現実志向的対処群』において, 心理的 well-being との間に正の相関, BDI との間に負の相関を示す傾向がみられた。以上の分析から得られた各クラスタの特徴の概略を Table 10 に示す。

内省的対処群の特徴 この群は死の不安を感じながらも死について考え, 他人に気持ちを話して落ち着こうとする群だと考えられた。『現実志向的対処群』と比較して抑うつが高いことから, 死について情報を集めたり, その不安を他人に話したりする群は, 健康に注意し, 悔いのない生活を送ろうとする群よりも抑うつが高いことが考えられる。伊藤・上里 (2001) はネガティブな事柄を繰り返

Table 6
内省的対処群における死の不安と精神的健康の関連

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 人格的成長	—									
2 人生における目的	.58 **	—								
3 自律性	.20	.46 **	—							
4 自己受容	.31 *	.63 **	.55 **	—						
5 環境制御力	.62 **	.56 **	.44 **	.55 **	—					
6 積極的な他者関係	.56 **	.45 **	.29 *	.37 **	.55 **	—				
7 BDI	-.31 **	-.54 **	-.35 **	-.64 **	-.40 **	-.43 **	—			
8 死に関する無力感	-.04	.01	-.05	-.05	-.17	-.03	-.16	—		
9 未完	.43 **	.44 **	.29 *	.30 *	.27 *	.41 **	-.47 **	.51 **	—	
10 具体的苦痛	-.33 **	-.16	-.09	-.09	-.30 *	-.24 †	.09	.54 **	.17	—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 7
非関与群における死の不安と精神的健康の関連

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 人格的成長	—									
2 人生における目的	.65 **	—								
3 自律性	.44 **	.38 **	—							
4 自己受容	.45 **	.37 *	.51 **	—						
5 環境制御力	.66 **	.35 *	.46 **	.62 **	—					
6 積極的な他者関係	.53 **	.43 **	.13	.40 **	.51 **	—				
7 BDI	-.50 **	-.38 **	-.29 *	-.38 **	-.50 **	-.32 *	—			
8 死に関する無力感	-.25 †	-.15	-.41 **	-.13	-.25 †	-.20	.25 †	—		
9 未完	.15	.39 **	-.01	.25 †	.01	.21	-.18	.30 *	—	
10 具体的苦痛	-.33 *	-.24	-.31 *	-.11	-.27 †	-.28 †	.36 *	.57 **	.06	—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 8
積極的関与群における死の不安と精神的健康の関連

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 人格的成長	—									
2 人生における目的	.57 **	—								
3 自律性	.10	.28 †	—							
4 自己受容	.19	.37 *	-.08	—						
5 環境制御力	.39 *	.21	-.09	.53 **	—					
6 積極的な他者関係	.50 **	.20	-.22	.39 *	.62 **	—				
7 BDI	-.12	-.26	-.08	-.21	.17	.04	—			
8 死に関する無力感	-.07	.02	-.20	.06	.31 *	-.12	.12	—		
9 未完	-.02	.01	.01	.24	.31 †	-.07	-.04	.68 **	—	
10 具体的苦痛	.13	.07	-.02	.07	.49 **	.19	.30 †	.67 **	.39 *	—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 9

現実志向的対処群における死の不安と精神的健康の関連

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 人格的成長	—									
2 人生における目的	.43 **	—								
3 自律性	.11	.40 **	—							
4 自己受容	.24 *	.49 **	.43 **	—						
5 環境制御力	.48 **	.54 **	.30 **	.61 **	—					
6 積極的な他者関係	.61 **	.38 **	-.08	.23 *	.50 **	—				
7 BDI	-.09	-.32 **	-.33 **	-.48 **	-.40 **	-.16	—			
8 死に関する無力感	-.02	-.06	-.27 *	-.11	-.10	.09	.07	—		
9 未完	.22 *	.31 **	.06	.09	.14	.22 *	-.11	.60 **	—	
10 具体的苦痛	-.02	-.03	-.26 *	-.10	-.06	-.02	.26 *	.56 **	.27 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 10

各クラスにおける死の不安と精神的健康、および両者の関連

クラス	死の不安	精神的健康	死の不安と精神的健康の関連
内省的対処群	『積極的関与群』『現実志向的対処群』と同程度	『現実志向的対処群』よりも抑うつが高い	死に伴う存在の消滅、および死ぬ瞬間の苦痛に関する不安と精神的健康の間に負の相関、悔いを残したまま死ぬことへの不安と精神的健康の間に正の相関
非関与群	他の3群よりも低い	『現実志向的対処群』よりも暖かい他者関係の感覚が乏しい	死ぬ瞬間の苦痛に関する不安と、周囲の環境をコントロールできる有能感の間に正の相関
積極的関与群	『現実志向的対処群』よりも死ぬ瞬間の苦痛に関する不安が高い	他の3群と同程度	『内省的対処群』『非関与群』と同様
現実志向的対処群	『積極的関与群』よりも死ぬ瞬間の苦痛に関する不安が高い	他の3群よりも自分は成長し続ける存在だという感覚が強い	

振り返ると抑うつを強める可能性を指摘しており、死の不安を抱えた状態でさらに死に直面化することで、抑うつを強めていることが推察される。本研究においては、「熟考」対処は BDI との間に正の相関を示しており (Table 2)、朝野他 (1988) が死の不安と正の相関を示す性格特性として抑うつ性をあげていることから、「熟考」対処を通して死に向き合い続けることで、死の不安は維持され、抑うつにつながっていることが考えられる。『内省的対処群』は「熟考」対処によって高まった不安を他人に話すなど「感情表出」対処をすることで不安を和らげようとしている可能性がある。また、この群は「未完」と精神的健康のすべての指標との間に正の相関を示した。このことから、死の不安の中でも「まだやり残したことがある」「したいことが山ほどあるので死ねない」といった、悔いを残したまま死ぬことへの不安は、『内省的対処群』における精神的健康の全体的な向上と関連していることが考えられる。

非関与群の特徴 この群は、他の3クラスと比較して死の不安が低く、死への対処の必要性を感じていない群だと考えられる。しかし、自分の身を守ろうとしない傾向は不適応的であり、死の不安に適切に対処しているというよりも、投げやりな態度をとっていることがうかがえる。また、毎日を充実させ、病気や事故に注意する群と比較して、暖かい他者関係の感覚に乏しいことも大きな特徴であると考えられる。このことから、『非関与群』は死の危険につながるような無謀な行動 (Hankoff, 1975) のリスクを抱えていると考えられる。『非関与群』においても、「死に関する無力感」

および「具体的苦痛」と精神的健康との間に負の相関、「未完」と精神的健康の間に正の相関がみられており、死の不安と精神的健康の関連は他の群と類似していることが推察される。

積極的関与群の特徴 どの対処の得点も全体的に高く、死の不安に様々な対処方略を用いる群だと考えられた。「具体的苦痛」が『非関与群』『現実志向的対処群』よりも高く、「環境制御力」との間に正の相関が示された。したがって、死の不安に多様な対処を用いる群においては、死に直面したときの苦痛に関する不安と周囲の環境をコントロールできる感覚は正の相関関係にあると考えられる。この背景には、様々な方法で死の不安に柔軟に対処することで、自分の周囲の環境や資源に有効に働きかけることができる有能感を獲得した、などの要因が影響していると考えられる。

現実志向的対処群の特徴 後悔のない人生を送るよう努めるとともに、健康や事故に気をつけている群だと考えられた。この群は、他の3群と比較して「人格的成長」の値が有意に高かった。このことから、病気や事故に注意し、悔いのない人生を送るよう努める群は、自分は成長し続ける存在であるという感覚を有しており、将来への見通しが明るく精神的健康が良好であると考えられる。また『内省的対処群』と対比して考えると、死に関する情報を集めたり、他者に死の不安を話したりするよりも、日常生活を充実させ健康に気を遣う方が抑うつ低下につながるということが推察される。

調査2

目的 調査1では、『内省的対処群』『非関与群』『積極的関与群』『現実志向的対処群』の4つの死の不安への対処方略の類型が示された。しかし、それぞれの対処方略を選択した要因や、各群の青年が自分自身の死をどう認識しているかは明らかになっていない。以上のことから調査2では、自由記述を参考に、それぞれの対処方略を選択する青年の死に対する考え方の特徴について検討する。

方法 対象者 調査1の分析対象247名のうち、自由記述の回答が得られた171名。

手続き 171名分の自由記述を意味単位で切片化し、248枚のカードを作成した。これらのカードについてクラスタごとにKJ法(川喜田,1967)を用いてグループ編成を行い、図解を試みた。

結果と考察 上記の分析の結果、得られた図解をFigure 2~5に示す。図中の四角形と角の丸い四角形は、それぞれ小グループと大グループを示している(以下、本文中では小グループを〈〉、大グループを《》とする)。各クラスタの共通点〈死のリアリティの希薄さ〉〈自殺の否定〉〈日常生活の充実〉といった小グループはどのクラスタにも共通してみられ、普遍的な青年の死に対する態度であると考えられる。また、死について考えない〈死についての思索の否定〉、死を怖いとは思わない〈死の恐怖の否定〉などの小グループも各クラスタに共通してみられる特徴であった。

内省的対処群 〈死後の世界についての思索〉によって、〈死後の世界への恐怖〉を感じていることが示唆され、クラスタの特徴に合致していると考えられる。一方、〈死の不可避性〉は《死への対処方略》の〈日常生活の充実〉との関連が示され、『内省的対処群』においても悔いのない人生を送るよう努めていること、その背景には死は不可避であることの認識が関連していることが推察された。

非関与群 〈死の不可避性〉は《死への対処方略》〈死の不可避性による死へのあきらめ〉との関連が示され、死は避けられないのしょうがない、仕方がないことであるとあきらめていることが

内省的対処群

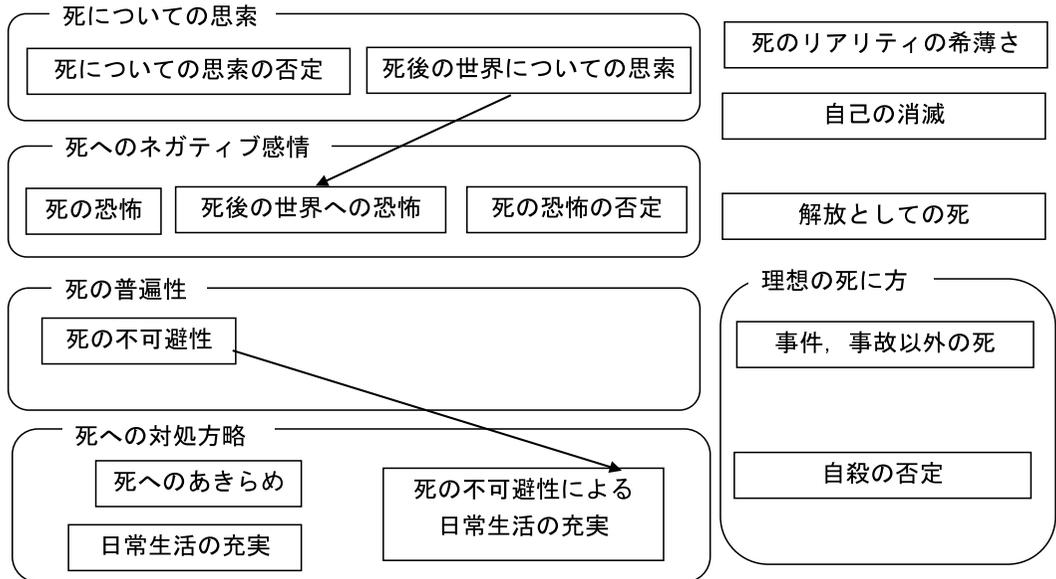


Figure 2. 内省的対処群における自由記述の KJ 法による分析結果

非関与群

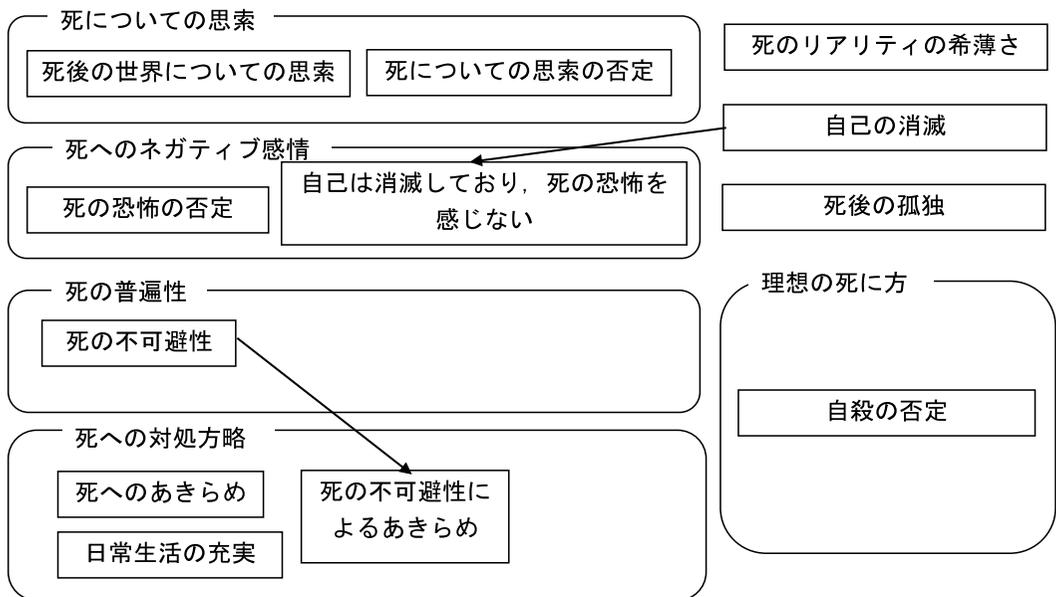


Figure 3. 非関与群における自由記述の KJ 法による分析結果

積極的関与群

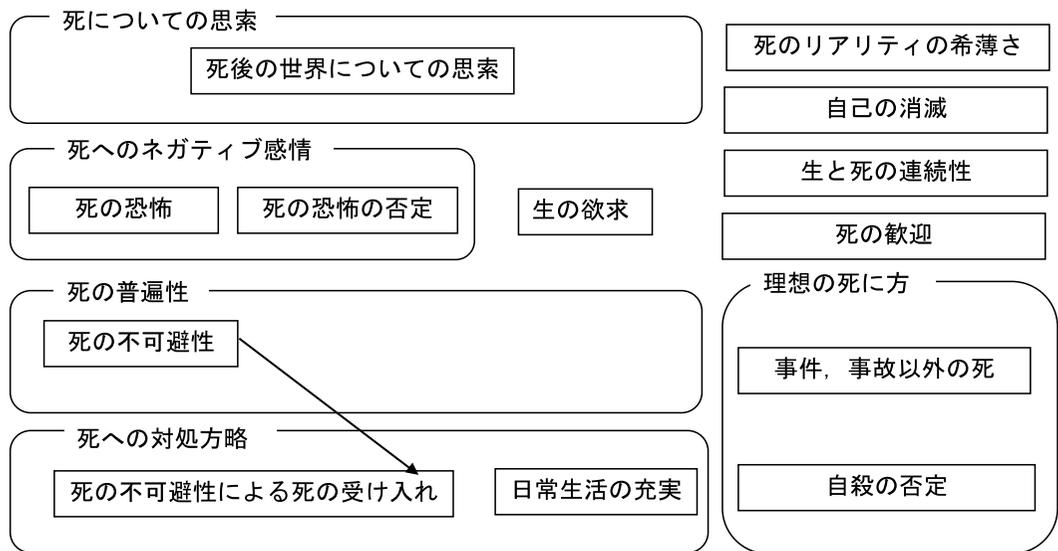


Figure 4. 積極的関与群における自由記述の KJ 法による分析

現実志向的対処群

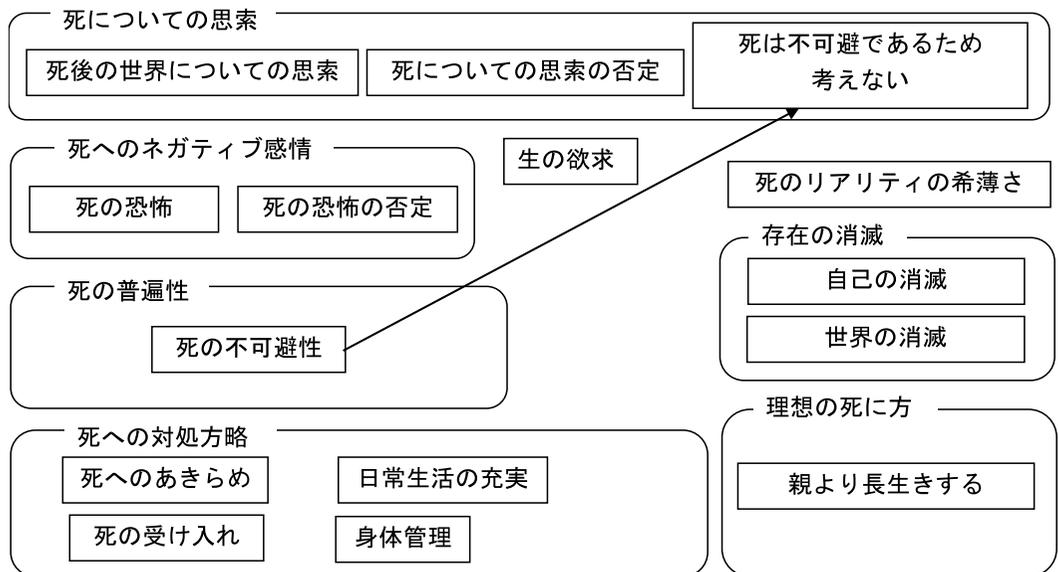


Figure 5. 現実志向的対処群における自由記述の KJ 法による分析結果

推察される。他の群にみられる〈死の恐怖〉小グループがないことや、〈自己は消滅しているので、死の恐怖を感じない〉小グループからは、ネガティブ感情の低さがうかがえた。

積極的関与群 〈死の不可避性〉が〈死の不可避性による死の受け入れ〉につながっていること

が示され、死は避けられないので、死が訪れたときは受け入れようとしていることが推察される。このような記述がみられた背景には、死の不安に様々な対処方略を用い、死についての理解を深めたことや、自分のできる限りの対処を行った結果、死の受け入れに至ったといった要因の存在が考えられる。数量的分析の結果とは異なり、多様な対処方略の小グループがみられなかった理由としては、『積極的関与群』の人数が $N=41$ と各クラスタの中で最も少なく、自由記述のバリエーションが多様でなかったことが考えられる。

現実志向的対処群 〈死の不可避性〉が〈死は不可避であるため考えない〉ことと関連していることが示され、死を避けられない事象だと認識し、一定の距離をとっていることがうかがえた。〈身体管理〉小グループが生成され、クラスタの特徴と合致した記述が得られた。

総合考察

本研究の目的は死の不安への対処方略の組み合わせによって、死の不安および精神的健康の程度、両者の関連が異なるか検討すること、それぞれの対処方略を選択する青年の死に対する考え方の特徴について検討することであった。調査1では、死の不安への対処方略の違いによって、死の不安と精神的健康の関連が異なることが示された。特に、死に直面した際の苦痛に関する不安に対して、『積極的関与群』のように様々な対処方略を用いることが、精神的健康の向上と関連していることが示唆された。また、『現実志向的対処群』のように、健康や事故に注意し、悔いのない生活を送ろうとすることは、『内省的対処群』や『非関与群』と比較して、精神的健康を損ないにくい可能性が推察された。金児 (1994) は死の不安を多次的にとらえることの重要性を指摘しており、本研究では死の不安の中でも、悔いを残して死ぬことへの不安は精神的健康と正の相関関係にあることが示された。この結果から、死の不安は必ずしも低減すべきものではなく、何に対する不安なのかを明らかにした上で介入することが必要だと考えられる。調査2の自由記述の分析からは、死の不可避性を認識することが対処方略の選択に関連していることが推察された。先行研究では、ネガティブな事柄を繰り返し考える傾向が死の不安への対処を規定することが指摘されている (浅本他, 2006)。本調査の結果から、死は誰にでも訪れ、避けられないことの認識も対処方略の決定に関与している可能性が示唆された。調査1, 2より、青年期においては病気や事故に注意し、毎日を充実させるような生き方をすることが精神的健康の向上と関連している可能性が

最後に本研究の限界と今後の課題について述べる。本研究では、一時点での死の不安しか測定していないため、死の不安が対処方略によってどう変化し、精神的健康が向上したかどうかを捉えることができなかった。今後は、縦断的な調査を行い対処方略の効果をより詳細に検討していくことが必要だと考えられる。加えて、死の不可避性がなぜ対処方略の違いと関連しているのか、選択に多様性が生まれるのはなぜか、不可避性の認識と対処方略の間にある要因が何であるかを検討していくことが必要と思われる。また、参加者がこれまでに経験してきた死別体験などのライフイベントやその捉え方を要因に加え、検討を行うことが必要と考えられる。

引用文献

- 赤澤正人・藤田綾子 (2007). 青年期の死生観に関する研究 日本教育心理学会総会発表論文集, 49, 338.
- 赤澤正人・辻本寛和 (2003). デス・エデュケーションが及ぼす効果に関する影響——試作プログラムによる介入実験を通して—— 臨床死生学年報, 8, 2-14.
- 浅本有美・小川俊樹・鈴木伸一 (2006). 青年期におけるネガティブな反すうが死の不安とその対処に与える影響 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 5, 6-15.
- 朝野 聡・滝本信貴・野原三洋子・野原忠博 (1988). 死の不安と告知に関する一考察 保健の科学, 30, 265-269.
- Beck, A.T., Steer, R. A., & Brown, G.K.,(著) 小嶋雅代・古川壽亮 (訳) (2003) 日本版 BDI -II 手引 日本文化科学社
- Collett, L., & Lester, D. (1969). The fear of death and dying. *Journal of Psychology*, 72, 179- 181.
- Conte, H. R., Weiner, M. B., & Plutchik, R. (1982). Measureing death anxiety:Conceptual, Psychometric, and factor-analytic aspects. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 775-785.
- Cox, B. J., Borger, S. C., Asmundson, G. J. G., & Taylor, S. (2000). Dimensions of hypochondriasis and five-factor model of personality. *Personality and Individual Differences*, 17, 237-248.
- Deeken, A. (1986). 死への準備教育の意義:生涯学習として捉える Deeken, A.・メヂカルフレンド社編集部 (編) 死への準備教育:第1巻 死を教える メヂカルフレンド社 pp.1-62.
- Durlak, J. A. (1972). Relationship between individual attitudes toward life and death. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 38, 463.
- 藤井美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ:テキストマイニングによる分析 関西学院大学社会学部紀要, 95, 145-155.
- Frazier, P. H., & Foss-Goodman, D. (1988-1989). Death anxiety and personality:Are they truly related? *Omega:Journal of Death and Dying*, 19, 265-274.
- Hankoff, L. D. (1975). Adolescence and the crisis of dying. *Adolescence*, 10 (39), 373-389.
- 橋本めぐみ (2001). 死の不安と心理的支えに関する研究 臨床死生学年報, 6, 39-45.
- 堀 薫夫 (1996). 大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較 大阪教育大学紀要 IV 教育科学, 44, 185-197.
- Hoelter. J. W., (1979). Multidimensional Treatment of Fear of Death *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 996-999.
- 伊藤正哉・小玉正博 (2005). 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 伊藤 拓・上里一郎 (2001). ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討 カウンセリング研究, 34, 31-42.
- 一色康子・河野政子 (2000). 看護学生と他分野学生の死のイメージに関する調査研究 ——調査項目の所属間の比較による検討—— 看護学統合研究, 2, 57-61.

- 金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究, 46 (10), 537-564.
- Kastenbaum, R. (2007). Death Anxiety, George Fink (Ed.), *Encyclopedia of stress* Volume2, 717-722.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996). 老年期における死に対する態度 老年社会科学, 17, 107-116.
- 川喜田二郎 (1967). 発想法 中央公論社
- Keyes, C. L. M., Shmotkin, D., & Ryff, C. D. (2002). Optimizing well-being: The empirical encounter of two traditions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 1007-1022
- 木村正治・広海義介 (1990). 大学生の死の不安に影響を及ぼす因子について ——「死の教育」のための基礎的調査の分析—— 熊本大学教育実践研究, 7, 1-8.
- 久保田 彩 (2013). 死の不安と死に関する思索が精神的健康に与える影響 日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 1106.
- Kübler-Ross, E. (1971). 死ぬ瞬間 読売新聞社
- 隈部知更 (2003). DAP-R 日本語版の内容の妥当性--死への態度と信仰の関係 心理臨床学研究 20, 601-607.
- 松田茶茶 (2012). 「死の不安」の心理学 ——青年期の特徴と課題—— ナカニシヤ出版
- 松田信樹 (1996). 青年の死の不安を規定する要因についての検討 ——性差, 死別経験, 時間的展望の観点から—— 人間科学研究, 4, 57-65.
- 松下千賀 (2009). 青年期の死の不安と死生観 ——高齢者との比較から—— 龍谷大学大学院文学研究科紀要, 31, 103-123.
- Miller, R. L., & Mulligan, R. D. (2002). Terror management: the effects of mortality salience and locus of control on risk taking behaviors. *Personality and Individual Differences*, 33, 1203-1214.
- 西田裕紀子 (2000). 成人女性の多様なライフスタイルと心理的 well-being に関する研究 教育心理学研究, 48, 433-443.
- 尾方 綾・松下姫歌 (2009). 死別体験と「死」のイメージおよび死への態度との関連 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 58, 159-168.
- 岡村達也 (1983). 「死に対する態度」の研究 ——青年と成人との比較—— 東京大学教育学部紀要, 23, 331-343.
- Rasmussen, C. A., & Brems, C., (1996). The relationship of death anxiety with age and psychosocial maturity. *The Journal of Pshchology*, 130, 141-144.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2001). On happiness and human potentials: A review of research on hedonic and eudaimonic well-being, *Annual Review of Psychology*, 52, 141-166.
- Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it? Explorations on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- Spilka, B., Stout, L., Minton, B., & Sizemore, D. (1977) Death and personal faith: A psychometric investigation. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 16, 169-178.
- 清水裕士・村山綾・大坊郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1) ——

- コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用—— 電子情報通信学会技術研究報告, 106 (146), 1-6.
- 下仲順子 (1980). 青年群との対比における老人の自己概念 —— 世代差, 性差を中心として —— 教育心理学研究, 28, 303-309.
- 田中愛子・後藤政幸・岩本 晋・李 惠英・杉 洋子・金山正子・奥田昌之・國次一郎・芳原達也 (2001). 青年期および壮年期の「死に関する意識」の比較研究 山口医学, 50, 697-704.
- 丹下智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, 70, 327-332
- 丹下智香子 (2004). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 15 (1), 65-76.
- 辰巳有紀子 (2000). 日本の高齢者における死の不安と死生観 聖心女子大学大学院論集, 22, 105-120
- Templer, D.I. (1970). The construction and validation of a Death Anxiety Scale. *Journal of General Psychology*, 82, 165-177.
- 得丸定子・小林輝紀・平 和章・松岡 律 (2006). 日本の大学生における死と死後の不安 日本家政学会誌, 57 (6), 411-419.
- 富松梨花子・稲谷ふみ枝 (2012). 死生観の世代間研究 久留米大学心理学研究, 11, 45-54.
- Tomer, A., & Eliason, G. (1996). Toward a comprehensive model of death anxiety. *Death Studies*, 20, 343-365.
- 辻本 耐・久保田 彩 (2013). 日本語版 Collet-Lester Fear of Death Scale の作成 日本発達心理学会第 24 回大会発表論文集, 602.
- 渡辺美那子・平井 啓 (1999). 青年の職業観と死生観との関連性について 大阪大学臨床老年行動学年報, 4, 26-36.